鳥取県教育文化財団調査報告書 95

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県西伯郡名和町

名和乙ヶ谷遺跡
名和小谷遺跡

2004

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県西伯郡名和町

名和乙ヶ谷遺跡
名和小谷遺跡

2004

財 団 法 人　鳥取県教育文化財団
国 土 交 通 省　倉吉河川国道事務所

1．玦状耳飾

2．遺1完掘状況（北西から）

巻頭図版２　名和小谷遺跡

１．調査地全景（南西から）

２．ナイフ形石器

３．分銅形土製品（表）

４．分銅形土製品（裏）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道９号（名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある名和乙ヶ谷遺跡では平安時代の道跡、名和小谷遺跡では後期旧石器時代のナイフ形石器など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有田博充

序　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691ｋｍの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡泊村から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は西伯郡名和町から淀江町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成15年度は、「古御堂笹尾山遺跡」「古御堂新林遺跡」「押平尾無遺跡」「茶畑六反田遺跡」「名和飛田遺跡」「名和乙ヶ谷遺跡」「名和小谷遺跡」の７遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「名和乙ヶ谷遺跡」と「名和小谷遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成16年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所
所　　長　矢　田　光　夫

例　言

1．本書は、一般国道９号（名和淀江道路）改築事業に先立ち、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが平成15（2003）年度に発掘調査を実施した名和乙ヶ谷遺跡、名和小谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書に収載した遺跡の所在地は以下のとおりである。
　名和乙ヶ谷遺跡　：　鳥取県西伯郡名和町大字名和字乙ヶ谷1173-1ほか
　名和小谷遺跡　：　鳥取県西伯郡名和町大字名和字小谷897-3ほか
3．本書における方位、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅴ系の座標値で、南北方向はアルファベット、東西方向はアラビア数字で北東杭を基準とする10mグリッドを設定した。レベルは海抜標高（m）を表す。
4．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／25,000地形図「淀江」「御来屋」「船上山」を使用した。
5．調査前地形測量および10m方眼杭設定は、業者に委託した。
6．調査前および調査後の航空写真撮影は、業者に委託して撮影した。
7．本書に掲載した遺構及び遺物の写真は各遺跡発掘担当調査員が撮影した。
8．各遺跡の出土遺物・図面・写真は鳥取県埋蔵文化財センターが保管する。
9．本書の作成は、文化財主事、調査員の協議に基づき執筆した。
10．名和乙ヶ谷遺跡の調査は主に調査員日置が、名和小谷遺跡の調査は文化財主事森本と調査員三木が担当した。
11．名和小谷遺跡出土のナイフ形石器の所見は岡山大学文学部教授稲田孝司氏に頂いた。
　ナイフ形石器及び石鏃の石材産地分析と鑑定、分析表は業者に依頼した。
12．各遺跡出土鉄遺物については、たたら研究会委員　穴澤義功氏にご指導頂いた。
13．報告書作成にあたり、上記の方々のほかに、多くの方々や組織に御指導・御協力をいただいた。記して感謝いたします。
　甲斐　昭光　島根県埋蔵文化財センター　辻　佰広　丹羽野　裕　　守岡　正司　　山本　滅　山下　史朗　湯村　功
　（五十音順、敬称略）

凡　例

1．発掘調査時における遺構名、番号は報告書作成時に変更しているものがある。新旧については本文中に対応表を掲載した。
2．遺跡の略号は次のとおりである。　名和乙ヶ谷遺跡：ＮＯＴ、名和小谷遺跡：ＮＫＴ
3．遺物番号は、次のように記す。なお、遺物には遺跡名略号、グリッド名、遺構名、取り上げ番号、取り上げ年月日を明記した。
　番号のみ：土器　　Ｓ：石器　　Ｆ：鉄製品・鉄滓
4．遺構・遺物番号は遺跡ごとに、挿図・挿表・遺物観察表・図版は通しの番号をつけた。本文中、挿図中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5．土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版　標準土色帖』（日本色彩研究所　2002）に準じている。
6．遺物実測図の凡例は以下のとおりである。
　・遺物実測図の断面は、須恵器が黒塗り、それ以外は白抜きとした。
　・土器にみえるスクリーントーン、石製品にみえる記号は下記の通りである。
　⟶：ケズリの方向　　⇠⇢：磨耗範囲　　⟷：敲打範囲　　⊢⊣：ツブレ範囲

目　次

序
序文
例言・凡例
目次
挿図目次
挿表目次

第1章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査体制 …… 2

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境 …… 3

第3章　名和乙ヶ谷遺跡の調査

第1節　調査の概要 …… 6
第2節　基本層序 …… 8
第3節　遺構と遺物 …… 8
第4節　調査地内出土遺物 …… 17
第5節　まとめ …… 20
出土遺物観察表 …… 21

第4章　名和小谷遺跡の調査

第1節　調査の概要　1．調査の経過と方法 …… 22
　　2．基本層序 …… 23
第2節　第2遺構面の調査 …… 25
第3節　第1遺構面の調査 …… 27
第4節　遺物包含層の調査 …… 28
第5節　調査地内出土遺物 …… 29
第6節　名和小谷遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析 …… 33
第7節　まとめ …… 45
出土遺物観察表 …… 49

図版
報告書抄録

挿図目次

図１ 名和乙ヶ谷遺跡・名和小谷遺跡の位置
(S=1/5,000) …… 1
図２ 周辺の遺跡(S=1/50,000) …… 5

名和乙ヶ谷遺跡

図３ グリッドおよびトレンチ配置図(S=1/800)… 6
図４ 調査地調査前地形測量図(S=1/300)…… 7
図５ 調査地遺構平面図(S=1/300)…… 7
図６ 名和乙ヶ谷遺跡遺構平面図(S=１/600) … 9
図７ 調査地土層断面図(１)(S=1/100・1/40) …10
図８ 調査地土層断面図(２)(S=1/100・1/40) …12
図９ 遺１平面図・断面図(S=1/100) ……14
図10 遺２・土坑13平面図・断面図(S=1/50)……15
図11 溝１・土坑14～16平面図・断面図
(S=1/80・1/40) ……16
図12 調査地内出土遺物実測図
(S=2/3・1/3・1/4)……18

名和小谷遺跡

図13 調査前地形測量およびグリッド配置図
(S=1/800) ……22
図14 調査地西壁断面図(S=1/80) ……24
図15 第２遺構面平面図(S=1/800)……25
図16 土坑１～５遺構図(S=1/40) ……26
図17 第１遺構面平面図(S=1/800)……27
図18 土坑６・７遺構図(S=1/40)……28
図19 調査地内出土遺物実測図(１)(S=1/4)……29
図20 調査地内出土遺物実測図(２)
(S=2/3・1/1・1/4)……30
図21 調査地内出土遺物実測図(３)(S=1/3)……31
図22 調査地内出土鉄製品実測図(S=1/3)……32
図23 黒曜石原産地分布図 ……37
図24 ナイフ形石器実測図(S=4/5)……45
図25 山陰地方周辺のナイフ形石器出土地分布図
(S=1/3,000,000)……46
図26 分銅形土製品実測図(S=１/2) ……47
図27 山陰地方分銅形土製品出土地分布図
(S=１/2,000,000) ……48

挿表目次

表１ 周辺遺跡一覧表 …… 5

名和乙ヶ谷遺跡

表２ 新旧遺構対応表 …… 8
表３ 名和乙ヶ谷遺跡出土土器観察表 ……21
表４ 名和乙ヶ谷遺跡出土石製品観察表 ……21
表５ 名和乙ヶ谷遺跡出土鉄関連遺物観察表 …21

名和小谷遺跡

表６ 新旧遺構対応表 ……23
表７ 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の
平均値と標準偏差値(１)……38
表８ 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の
平均値と標準偏差値(２)……39
表９ 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の
平均値と標準偏差値(３)……40
表10 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の
平均値と標準偏差値(４)……41
表11 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と
標準偏差値(１)……42
表12 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と
標準偏差値(２)……43
表13 九州西北地域原産地採取原石が各原石群に
同定される割合の百分率(%) ……44
表14 名和小谷遺跡出土黒曜石製石器の元素比
分析結果……44
表15 名和小谷遺跡出土の黒曜石製石器の
原材産地分析結果……44
表16 山陰地方周辺におけるナイフ形石器出土地
一覧表……46
表17 山陰地方出土分銅形土製品出土地
分布表……48
表18 名和小谷遺跡出土遺物観察表 ……49
表19 名和小谷遺跡出土土製品観察表 ……49
表20 名和小谷遺跡出土石製品観察表 ……49
表21 名和小谷遺跡出土鉄製品観察表 ……49

第1章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯

一般国道9号は京都市から兵庫県、鳥取県、島根県を通り山口県下関市まで続く総延長691kmの幹線道路である。このうち国土交通省倉吉河川国道事務所では東伯郡泊村から米子市までの76.6kmを管轄する。羽合－青谷間、淀江－米子間はすでに高規格幹線道路(自動車専用道路)山陰道として開通・運用されている。この一環として名和－淀江間を連絡する名和淀江道路が計画されている。

名和町内での道路建設計画地は多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。名和町大字名和字乙ヶ谷に所在する名和乙ヶ谷遺跡は、昨年度調査した道路建設計画用地内で当初想定した範囲を超えて遺構が分布する事が判明したため追加調査を実施する事となった。名和町大字名和字小谷に所在する名和小谷遺跡においては埋蔵文化財の存在が予測できた為、名和町教育委員会は鳥取県教育委員会文化課との協議により試掘調査を実施した。その結果、遺構・遺物の存在が確認された為、発掘調査を実施する事となった。これらを受けて、原因者である国土交通省倉吉河川国道事務所は文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘の通知を提出、財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託し、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

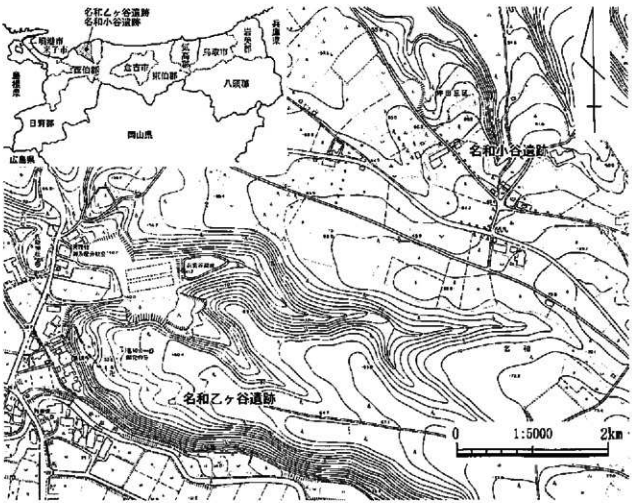

図1　名和乙ヶ谷遺跡・名和小谷遺跡の位置

第2節　調査体制

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田　博充
常務理事	川口　一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	下田　弘人

埋蔵文化財センター

所長	田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次長	竹内　茂
次長	加藤　隆昭
調査課長（兼）	加藤　隆昭
企画調整班長	山枡　雅美
文化財主事	下江　健太
庶務課長（兼）	竹内　茂
主任事務職員	矢部　美恵
事務職員	田中　陽子　大川　秋子　植田　恵子（9月退職） 谷垣真寿美　小谷　有里
事務補助員	山根　亮代（11月採用）

○調査担当　埋蔵文化財センター名和調査事務所

所長	岡田　俊雄
班長	西川　徹
事務補助員	金田かおる
［名和乙ヶ谷遺跡］文化財主事	北　浩明
調査員	日置　智　小林　桃子
調査補助員	秦　美香
［名和小谷遺跡］文化財主事	森本　倫弘
調査員	三木　雅子

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター

○調査協力　名和町教育委員会

名和乙ヶ谷遺跡・名和小谷遺跡ともに、現場作業に際しては発掘現場作業員の方々に、整理作業は整理作業員の方々に従事していただいた。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

名和町は県の西部、米子市の東方約20kmに位置し、東は中山町、南西は大山町に境を接している。北は日本海に臨み、はるか隠岐島を望む大山の裾野地帯にある。名和町域の地形は弥山などから噴出した名和火砕流や弥山火砕流などを基盤とし、香取を頂点として扇状に広がっている。西部は阿弥陀川によって形成された県下最大級の阿弥陀川扇状地が広がる。東部は火山台地が発達し、大山を源とする真子川などの河川と、無数に派生する谷によって台地・丘陵・段丘が開削されている。いくつかの台地は広く緩やかな傾斜が続き、名和小谷遺跡もこのような台地上に立地する。名和乙ヶ谷遺跡は、衣装谷と東谷川に開削された東西に長い丘陵上に立地する。

第2節　歴史的環境

1　旧石器時代～縄文時代

＜旧石器時代＞県内において遺構は確認されていないが、遺物は淀江町、関金町、倉吉市など大山北麓で発見されている。本書で報告する名和小谷遺跡では、後期旧石器時代の黒曜石製国府型ナイフ形石器が1点出土している。

＜縄文時代草創期＞陣構、上大山で有舌尖頭器が発見されている。中山町や淀江町などでも石器は発見されているが、遺構や土器は確認されていない。

＜縄文時代早期＞早期の押型文土器が上大山第1遺跡、角塚遺跡、高田第4遺跡、古御堂金蔵ヶ平遺跡などで出土している。茶畑山道遺跡では繊維土器が出土している。

＜縄文時代前期～後期、晩期＞前期の遺跡は確認されていなかったが、本書で報告する名和乙ヶ谷遺跡で玦状耳飾が出土し、隣接する名和飛田遺跡でも、洪水による砂礫層中から前期の土器が多量に出土した。この事から東谷川と名和川の上流に、前期の集落遺跡の存在が想定される。中期は名和衣装谷遺跡で土坑や遺物が出土している。後期は古御堂遺跡や南川遺跡があり、南川遺跡では石組炉をもつ住居跡が見つかっている。晩期には大塚遺跡、高田第10遺跡、文珠領墨敷遺跡などがあり、大塚遺跡では石囲い炉と、一部に敷石を備える竪穴住居跡が検出された。また、大山北麓の広範囲に落し穴状土坑が見つかっている。

2　弥生時代

＜弥生時代前期＞主に台地や幅広な丘陵上に遺跡が分布する。大塚岩田遺跡で出土した溝は、環濠の可能性もある。大塚塚根遺跡、茶畑山道遺跡、茶畑六反田遺跡でも土器片が確認されている。

＜弥生時代中期～終末期＞中期以降の集落は丘陵の縁辺に多く、後期になると丘陵上に営まれるようになる。今年度調査を行った遺跡を含む、茶畑周辺の一群の遺跡（茶畑遺跡群：図1の15～22）では、布掘り掘物跡や独立棟持柱をもつ大型建物跡、多数の竪穴住居跡などからなる集落遺跡が広がる。これらの遺跡群は同一集団が長期間に渡って、移動しながら居住したと考えられる。大山町から淀江町にかけて、後期に最盛期をもつ妻木晩田遺跡とは約4km隔てた位置にある。

3　古墳時代

茶畑遺跡群の集落は前期前葉も継続する。中期は判然としないものの、後期にはまた集落が営まれる。ほかに古墳時代を通じて大塚塚根遺跡が営まれる。古墳は中期後半に入るとハンボ塚古墳が現れる。これは周溝を伴う大型円墳で、円筒埴輪や人物、水鳥などの形象埴輪が出土している。後期には茶畑古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群などの群集墳のほか、豊成横穴墓群などの横穴も造営されている。

4　奈良～平安時代

奈良時代以降、名和町域の景観を復原できる良好な文献史料はない。律令制の下、伯耆国も国庁などの官衙や山陰道、寺院が整備された。平安時代に編纂された『延喜式』によると、伯耆国は6郡にわかれ、東から笏賀駅、松原駅、清水駅、和奈駅、相見駅の5駅の記載がある。汗入郡には和奈駅（奈和の誤記か）が置かれていたとあるが、詳細は不明である。長者原遺跡は郡衙推定地で、礎石抜き取り跡が調査され、付近から「財」銘の鋼印が採集されている。周辺には「馬郡」「東馬郡」「西馬郡」の字名が残り、名和駅の存在も推測される。高田原遺跡では乱石積基壇や溝が検出されており、淀江町の上淀廃寺と同笵の単弁十二葉蓮華文軒丸瓦が出土するなど、寺院の可能性があるが詳細は不明である。上寺谷遺跡では製鉄遺構が出土し、周辺では鉄滓が採集されるなど、鉄生産の拠点であった可能性がある。

平安時代前期の様相は不明瞭であるが、中期には名和町の茶畑六反田遺跡で、緑釉陶器や墨書土器などの遺物と、軸をほぼ北にする溝が見つかっている。これは条里区画の一部と考えられる。この時期は各地で条里制が整備されており、淀江平野に踏襲される条里区画は著名である。名和町では字名に「中坪」「岩坪」「大坪」などがみられ、地籍図や航空写真でも条里の痕跡が見られる。名和乙ヶ谷遺跡では、道の跡などの遺構と多数の鉄滓が出土していることから、近辺に鉄生産に関係する施設が存在すると推測される。名和衣装谷遺跡では、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土し、官衙もしくは、郡司の居宅内の雑舎とみられる大型建物跡が見つかっている。

5　鎌倉～室町時代

鎌倉時代中期頃までは茶畑六反田遺跡や文珠領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡のように扇状地上に集落が営まれるようになる。押平弘法堂遺跡では掘立柱建物のほか、土壙墓が見つかっている。茶畑六反田遺跡や文珠領屋敷遺跡では耕作痕跡が見つかっている。

元弘3（1333）年、名和長年が隠岐島を脱出した後醍醐天皇を迎えたと『太平記』にあるように、町域には、名和氏ゆかりの旧跡が多数存在する。名和公館跡伝承地、的石などである。また、荒松氏によって築かれたといわれる富長城跡や長野城跡などの城跡も残る。富長城跡は土塁が良好に残っている。さらに「門前」「陣構」といった字名もあり、山城や砦の存在が推定される。門前には、礎石群のほか白磁・青磁・染付などの遺物が出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。

6　近世以降

寛永9（1632）年に岡山藩主の池田光仲が鳥取藩主となり、明治維新まで池田氏の藩政が続く。御来屋は伯耆街道の宿駅で、藩倉も置かれるなど藩の運上米の積出港としても重要な位置を占め、汗入郡の中心地であった。

昭和29年には御来屋村・光徳村・名和村・庄内村が合併し今日の名和町となった。

参考文献

名和町誌編纂委員会編　1978『名和町誌』名和町誌編纂委員会
鳥取県埋蔵文化財センター編　1986『鳥取県の古墳』鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県埋蔵文化財センター編　1988『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
鳥取県埋蔵文化財センター編　1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
竹内理三編　1982『角川日本地名大辞典31 鳥取県』角川書店
有限会社平凡社地方資料センター編　1992『日本歴史地名大系32　鳥取県の地名』平凡社

図2　周辺の遺跡

表1　周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	名和乙ヶ谷遺跡	14	大塚塚根遺跡	27	富長山村古墳群
2	名和小谷遺跡	15	茶畑六反田遺跡	28	坪田古墳群
3	上大山第1遺跡	16	茶畑山道遺跡	29	豊成古墳群
4	角塚遺跡	17	茶畑第1遺跡	30	豊成横穴墓群
5	高田原第一遺跡	18	押平尾無遺跡	31	長者原遺跡
6	古御堂金蔵ヶ平遺跡	19	古御堂笹尾山遺跡	32	高田原遺跡
7	名和飛田遺跡	20	古御堂新林遺跡	33	上寺谷遺跡
8	古御堂遺跡	21	茶畑第2遺跡	34	名和衣装谷遺跡
9	南川遺跡	22	東高田遺跡	35	押平弘法堂遺跡
10	大塚遺跡	23	ハンボ塚古墳	36	名和公館跡伝承地
11	高田第10遺跡	24	茶畑古墳群	37	富長城跡
12	文珠領屋敷遺跡	25	高田古墳群	38	長野城跡
13	大塚岩田遺跡	26	門前古墳群	39	門前礎石群

第3章　名和乙ヶ谷遺跡の調査

第1節　調査の概要

調査地は東西に長い丘陵上に立地する。丘陵上へと登る山道によって分断された南側の尾根上である。平成14年度調査区の南西側にあたる。

発掘調査前は雑木林であった。樹木伐採後、重機を用いて表土剥ぎを行った。その後、10m方眼杭（グリッド）を設定し、調査前地形測量を行った。基準杭は南北軸を北からアルファベットで、東西軸を東から数字で示し、1区画（グリッド）の北東隅の交点をとって、そのグリッド名とした。なお、本調査区は平成14年度調査区に隣接するため、グリッドの呼称をそのまま連続させた。調査区は現況でも、平成14年度調査区から道路状遺構が伸びており、本調査区ほぼ中央から北側の山道へとゆるやかにカーブしているのが認められた。次いで調査区の基本層序を確認するためトレンチ1～4を設定した。その後、表土直下の遺物包含層以下を人力掘削し、遺構を検出した。検出した遺構は道路状遺

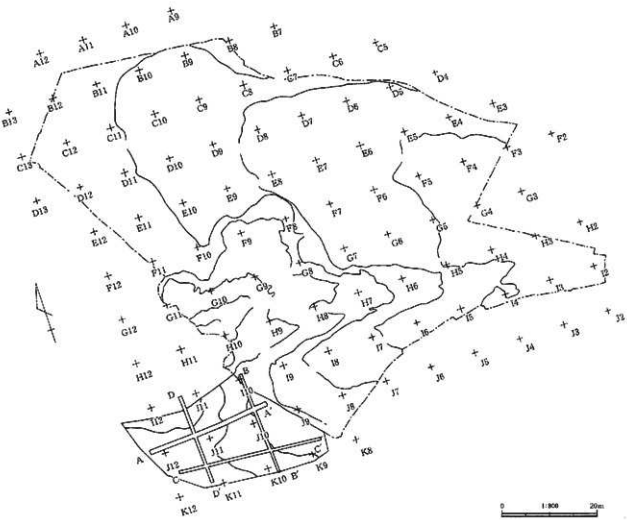

図3　グリッドおよびトレンチ配置図

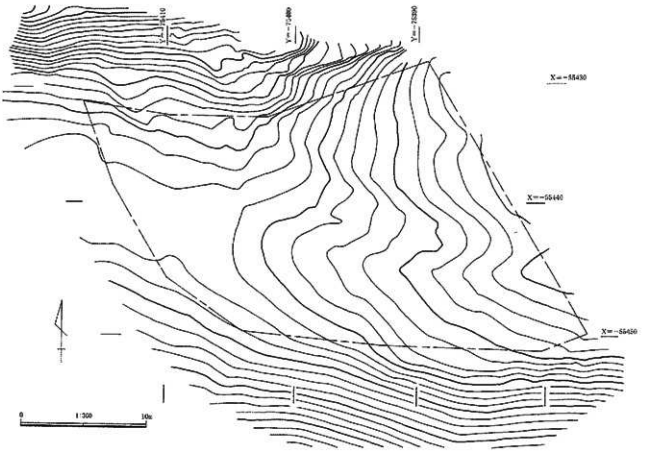

図４　調査地調査前地形測量図

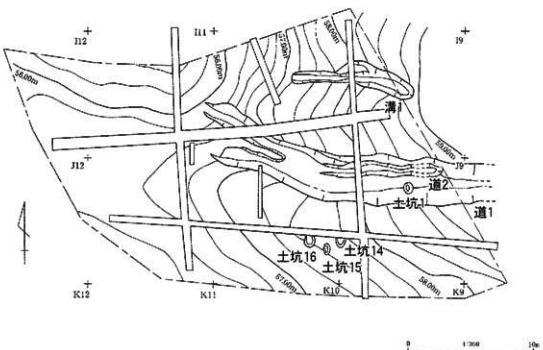

図５　調査地遺構平面図

構2条・溝1条・土坑4基である。出土した遺物は、鉄滓・石器・陶器・須恵器・弥生土器などコンテナ1箱分である。遺構の呼称も調査時のものを改めて、平成14年度調査のものから連続させて報告する。その対応は以下の通りである。

表2　新旧遺構対応表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
道1	道	道2	SD1	溝1	SD2
土坑13	SK1	土坑14	SK2	土坑15	SK3
土坑16	SK4				

第2節　基本層序

調査地内の地形は、後述する道1・2の両側が微高地になっており、西北方向へ緩やかに下る。平成14年度調査地の土層堆積と同様に、表土は10cm程度と薄く堆積していたが、表土直下に堆積する平安時代の遺物包含層であるⅠ層上面は激しく土壌化していた。調査地中ほどの、道1・2の西端周辺は、最も標高が低い部分であり、それより北西側は流土が厚く堆積している。その流土の最上層である（トレンチ1・トレンチ4の④層およびトレンチ3の①層）が縄文時代前期と晩期および弥生時代終末期の遺物包含層である。

概要は以下のとおりである。呼称は昨年度調査に準拠した。

Ⅰ層：にぶい褐色からにぶい橙色粘質土層　平安時代の遺物包含層。調査地の中ほどより東に堆積する。

i層：明褐色粘質土層　調査地の中ほどより北東側の標高の高い範囲に堆積する。

ii層：ＡＴ（姶良丹沢）火山灰層　i層と同様の範囲に堆積する。

iii層：橙色ローム層　上面の風化が激しいiii´層に細分が可能である。調査地東半に堆積する。

iv層：暗赤褐色粘質土層　調査地全域に堆積する。この層に含まれる軟質の巨礫や岩盤が露頭する部分があり、この岩盤から風化した灰白色の細礫を含む。

第3節　遺構と遺物

道路状遺構・溝・土坑などの遺構を検出した。遺構は調査区の中程より東側のi層が堆積する範囲に分布する。

道1（図9、巻頭図版1、図版2－2・3－1・3－2・5－5）

道1は平成14年度調査区から本調査区へ尾根に並行して伸び、本年度調査区のほぼ中心を通り、中程でカーブして西端は二又に別れて収まるように造られている。規模は本年度調査区では20.4m、昨年度調査区部分と合わせての全長は40.2m、幅は3.3m～4.5m、深さは40cm～60cmである。道1の西端二又部分の南側は、非常に浅い溝状を呈しそのまま収束してしまう。もう一方の北側の端は、地山中から巨大な岩盤が露出する部分で、その岩盤の南北両側を断面「V」字形の壁面に掘削して整形し

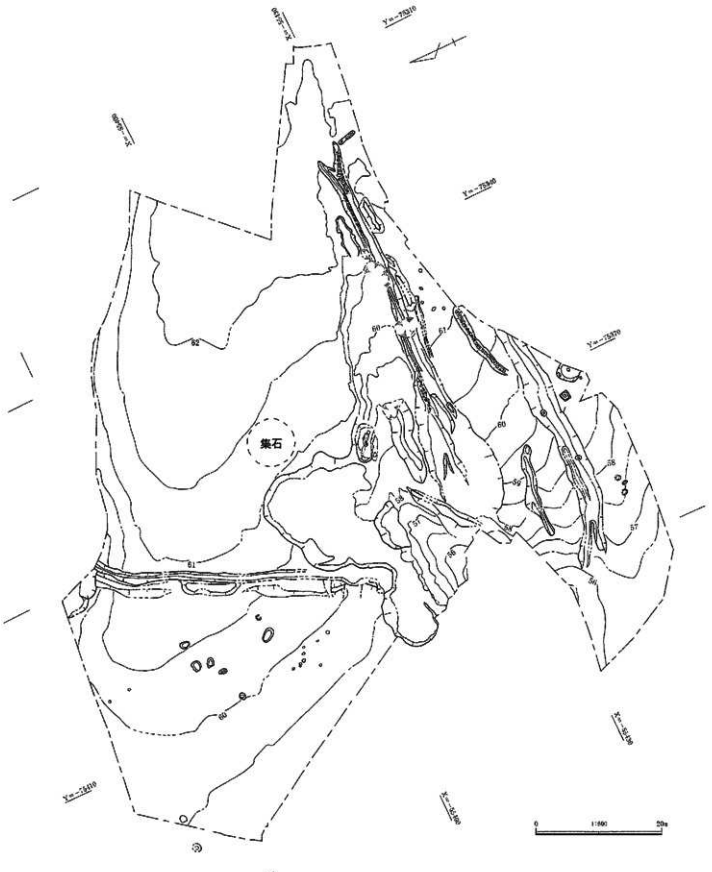

図６　名和乙ヶ谷遺跡遺構平面図

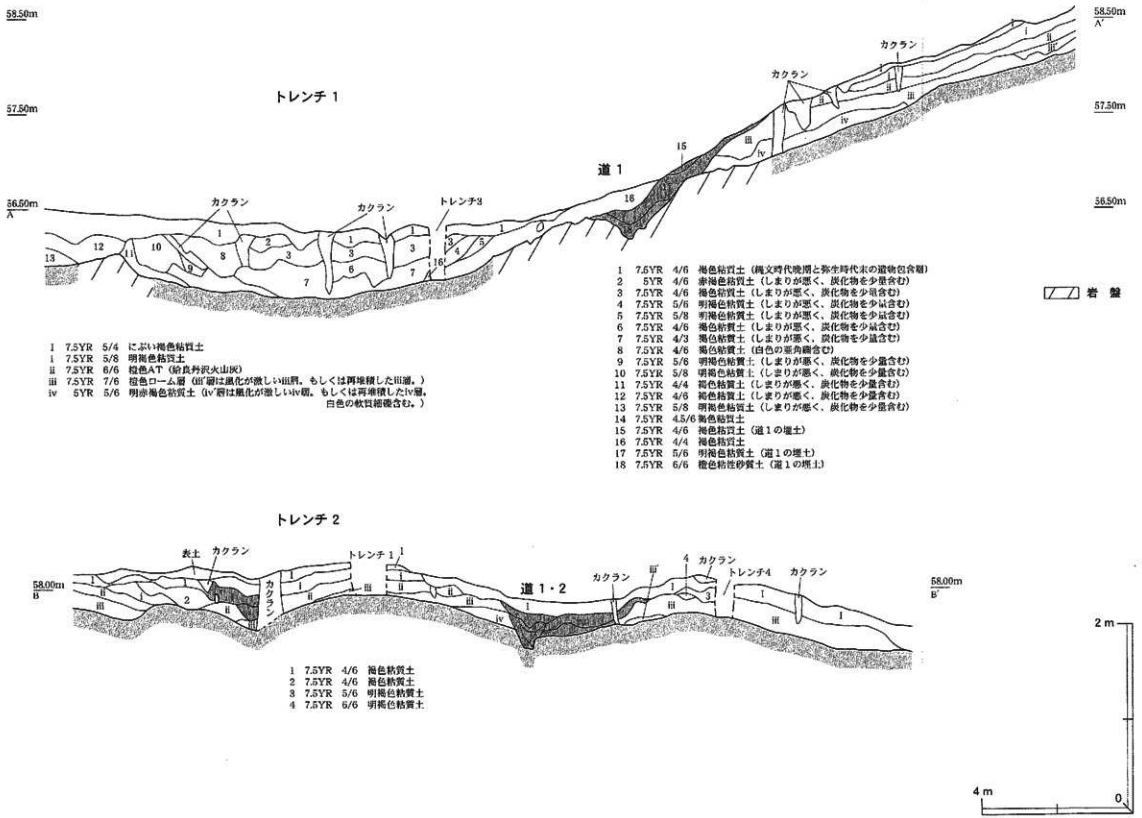

図７　調査地土層断面図（１）

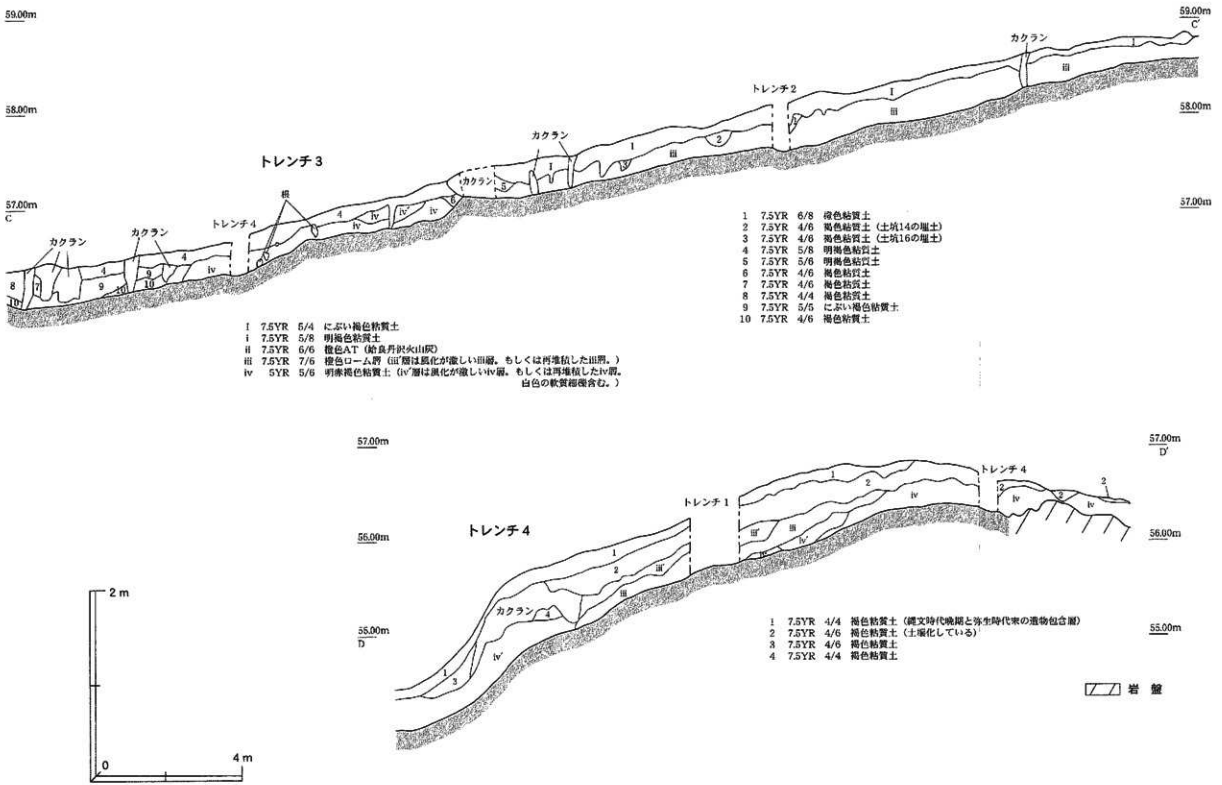

図8　調査地土層断面図（2）

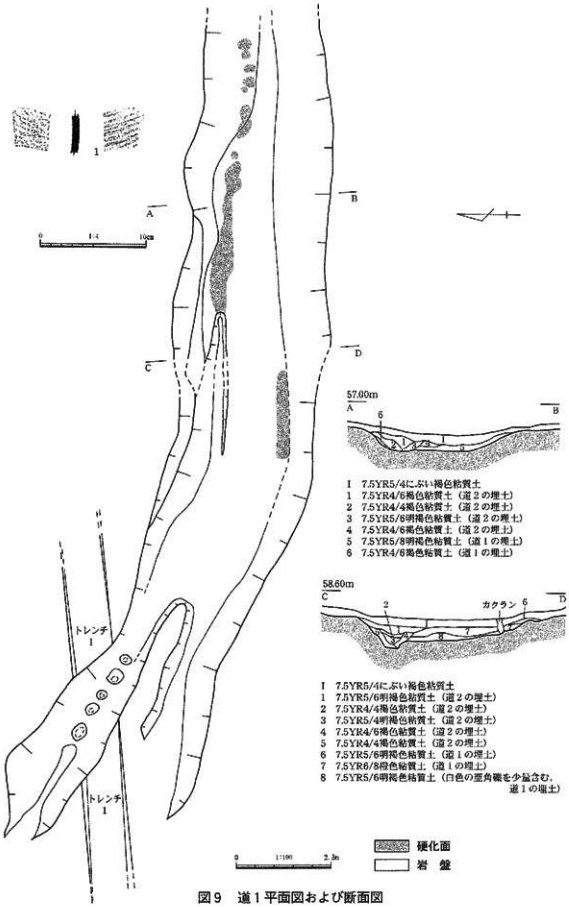

図9　道1平面図および断面図

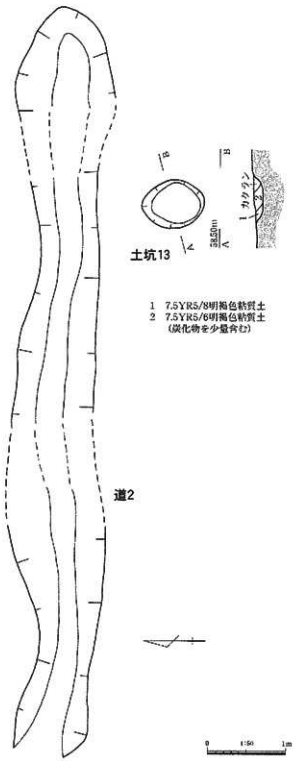

図10　道2および土坑13　平面図および断面図

ている。さらに底を5段の階段状に掘り込んで波板状凹凸面としている。この二又に分かれる部分のどちらか一方は、後述する道2の西端であると思われるが、撹乱と湧水によって層位的な確認はできなかった。岩盤部分以外の底面は、トレンチ2と直交する部分の南端底面がやや明褐色から橙色に硬化していたほか、トレンチ2以東の道1北端に沿って硬化面が残る。道1からは、須恵器の甕片（1）1点が出土した。層位関係と平成14年度調査での同遺構から出土した遺物の年代観から、同年度報告のとおり、平安時代の遺構である。

道2（図10、図版3）

道2は道1が廃絶され埋没した後に、道1の中に道1と方向を同じくして溝状に掘り込んだ道路状遺構である。規模は本年度調査地部分では19.5m、平成14年度調査地部分と合わせた全長は23.5m、幅1.5m～1.8m、深さ30cm～50cmである。土層断面をみると、道1の埋土は1層ないし2層で、道1が完全に埋没しないうちに道2を掘削している。道2からは遺物は出土しなかったため判然としないが、平成14年度調査地と本調査地での埋土堆積状況の観察からも、道1と道2の埋没にさほど時期差をおいてないであろう。

溝1（図11、図版4－1）

本年度調査地の北東部分、道1と道2の北側に約5m隔てて、両道路状遺構とほぼ平行する。規模は本年度調査地部分での長さは5.7mで、平成14年度調査地部分と合わせての全長は15m、幅は最小部で1m、最大部2mである。深さは20cm～32cmである。遺物は出土しなかった。平成14年度調査報告のとおりI層下面から検出したことから、平安時代の遺構であると考える。

土坑13（図11、図版4－2）

調査区の中央やや東寄りに位置する。道1が埋没した後に造られた、平面形が楕円形の浅い土坑である。規模は長径83cm、短径66cm、深さ12cmである。埋土は2層の地山に似た粘質土からなる。遺物は出土しなかった。この遺構の性格・用途は不明である。遺構の時期は、道2と同様に道1とさほど時期差はないだろう。

土坑14（図11、図版4－3）

道1と道2の南側に、後述する土坑15、土坑16と東西に連なるように位置する。平面形が楕円形の土坑である。トレンチ4を掘削する際一部を破壊してしまった。残存する規模は長径88cm、短径33cm、

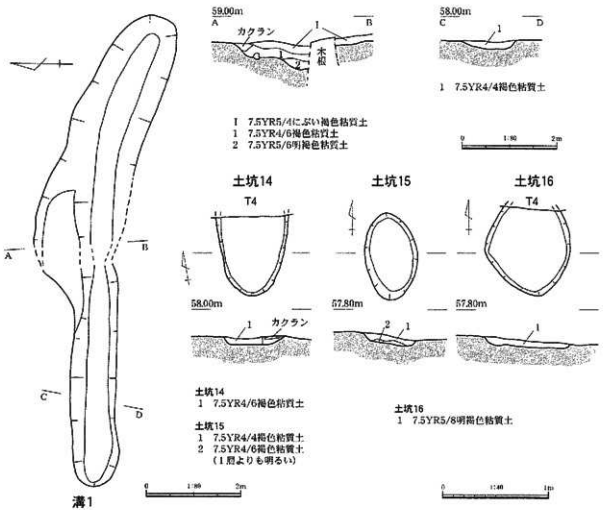

図11　溝1および土坑14・15・16　平面図および断面図

深さ8cmである。埋土はⅠ層に似た粘質土1層である。遺物は出土しなかった。この遺構の性格・用途は不明である。埋土の色調から道1と道2、土坑13より新しい時期の遺構であろう。

土坑15（図11、図版4－4）

調査区の南辺、土坑14の西隣に位置する浅い土坑である。平面形が楕円形で規模は長径94cm、短径56cm、深さ8cmである。埋土は土坑14の埋土と似た褐色の粘質土2層からなる。遺物は出土しなかった。この遺構の性格・用途は不明である。時期は土坑14と同時期の所産であろう。

土坑16（図11、図版4－5）

調査区の南辺、土坑15の西隣に位置する。平面形が不整な楕円形の浅い土坑である。土坑14と同様にトレンチ4と重複する。残存する規模は径90cm、深さ8cmである。埋土は地山と似た明褐色の粘質土1層からなる。遺物は出土しなかった。この遺構の性格・用途は不明である。

参考文献

中森　祥編　2003『鳥取県教育文化財団調査報告書83－一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ鳥取県西伯郡名和町名和乙ヶ谷遺跡』鳥取県教育文化財団　国土交通省倉吉工事事務所

第4節　調査地内出土遺物

平成14年度調査では、縄文時代後期および同時代晩期の土器、石鏃・石錐などの石器、奈良時代末から平安時代初頭、および平安時代中頃の須恵器や竈・皿などの土師器、近世の陶器、銭貨、古代の椀形鍛冶滓・鍛冶滓・製錬滓・鉄製品などの製鉄関連遺物が出土していた。本年度調査地内から出土した遺物には、椀形鍛冶滓・陶器・須恵器・土師器・弥生土器・縄文土器・石器などがある。出土量はごく少量である。図化できたものは12点である。椀形鍛冶滓・陶器・須恵器・土師器は、調査区のトレンチ4より北側の遺物包含層から出土したほか、遺構検出面の精査中に出土した。弥生土器・縄文土器・石器は調査区のトレンチ3より西側の遺物を包含する流土層中より出土した。（図12、巻頭図版1、図版5）

2は縄文土器の浅鉢である。遺構検出面の精査中に出土した。口縁部を欠損するが、胴部から「く」字状に鋭く屈曲して口縁部が外反気味に上方に伸びるものであろう。内面が黒色、外面褐色を呈し、焼成も良い。内外面とも横位にヘラミガキを著しく施す無文精製品である。時期は縄文時代晩期のものであろう。

3は弥生土器の甕の口頸部片である。J11グリッドの遺物を包含する流土層から出土した。遺存状態が悪く、焼成も軟質で内面の調整は不明である。外面は丁寧にナデており、口縁部下部はやや強くナデる。時期は弥生時代終末期、南谷大山編年でのⅣ期[1]に併行するものと考える。

4は土師器の杯の底部片である。回転台成形で底部の切り離しは回転ヘラ切りであろう。体部の調整は内外面とも荒く回転ナデを施す。小片であり時期は明確に比定できない。5は須恵器の甕である。溝1西端の流土の層から出土した。古市編年でのⅠ期（8世紀後半～9世紀初頭）[2]併行ものである。

6は陶器の土鍋である。口縁部の大部分と胴部は欠損する。口縁部外面および、頸部下から底部内

面にかけて褐釉を施している。生産地は不明である。近世のものである。7は肥前系陶器の鉢である。平成14年度調査で出土した鉢（遺物番号33）と同一個体である。肥前陶器の編年でⅣ期（1690年代～1780年代）のものである[3)]。

S1は珠状耳飾の破片である。珠状耳飾は石製の装身具で、一般に耳たぶに孔を空けて垂下させる耳飾と考えられている。トレンチ1（H11グリッド部分）の南層にあった倒木跡より出土した。完形であれば三角形のもので、ちょうど身の半分と脚線の一部が欠損する。完形時の中軸上に径9㎜の孔

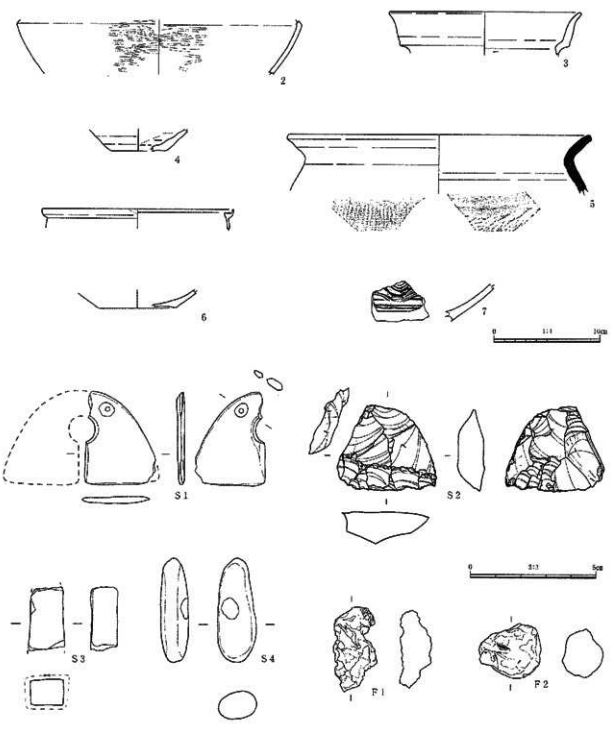

図12　調査地内出土遺物実測図

があり、その右上方に径２㎜の小孔がある。孔と小孔は両面から穿たれており、孔壁は「く」字状を呈する。この小孔は一般に、割れた玦状耳飾りを糸で結び付けて使用した補修孔と考えられている。表面は光沢を帯びて平滑である。切目と縁は両面から研磨されている。厚さはわずかに上辺が厚く脚は薄い。石材は灰白色の蛇紋岩製である。この玦状耳飾は、樋口清之氏の形態分類でのＥ類[4]に相当する。出土状況が悪く、所属する時期の比定が難しいが、藤田富士夫氏の研究と山陰地方でのほかの玦状耳飾出土例[5]では、縄文時代前期後葉から末葉のものと考えられている。なお樋口清之氏分類でのＥ類は、関東地方では縄文時代中期初頭まで残るようである。以上のことから縄文時代前期後葉から中期のものと考える。

Ｓ２は黒曜石製のスクレイパー（掻器）を転用した楔形石器である。トレンチ１とトレンチ３の直交する部分付近の流土の層から出土した。下端と右側縁に使用痕がある。時期は縄文時代晩期まで遡る可能性がある。

Ｓ３は砂岩製の砥石である。Ｊ９グリッドで遺構検出面の精査中に出土した。時期は、Ⅰ層下面から出土したことから平安時代のものであろう。

Ｓ４は用途不明の礫である。安山岩で先端の一部が摩滅している。Ｊ11グリッドの流土の層から出土した。

ＦⅠおよびＦ２は椀形鍛冶滓、いわゆる「かなくそ」である。いずれも、Ⅰ10グリッドの道の付近から、遺構検出面の精査中に出土した。

---

[1]牧本哲雄　1994　「土器編年について」『鳥取県教育文化財団調査報告書36　一般国道９号（羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　鳥取県東伯郡羽合町　南谷大山遺跡Ⅱ　南谷29号墳』　財団法人鳥取県教育文化財団　建設省倉吉工事事務所　および、清水真一　1992　「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編一』（正岡睦夫・松本岩雄編）　木耳社

[2]中森　祥　2002　「奈良時代後期～平安時代の土器様相」『鳥取県教育文化財団調査報告書　78　一般県道180号線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　鳥取県米子市　古市遺跡群３　古市宮ノ谷山遺跡　古市古墳群』　財団法人鳥取県教育文化財団

[3]九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』　九州近世陶磁学会

[4]樋口清之　1933　「玦状耳飾考」『考古学雑誌』23-１・２　考古学会

[5]藤田富士夫　1989　『玉（考古学ライブラリー52）』　ニュー・サイエンス社

第5節　まとめ

1．検出した遺構と遺物について

本年度調査地では時期を比定できなかった遺構もあるが、遺構外からの出土遺物と平成14年度調査での成果も合わせてみると、検出した遺構・遺物の時期は、縄文時代前期・同時代中期・同時代晩期・弥生時代終末期・平安時代・近世の6時期に渡る。

また、本年度調査では平成14年度調査で検出していた、平安時代の道路状遺構2条と溝1条の続きの部分を検出し、各遺構の全体を確認した。道1と道2はともに、現在も坪田集落が営まれる平地から登ってくる山道に接続していたようである。加えて、平成14年度調査では多数の製鉄関連遺物が出土し同年調査報告において、この道路状遺構と製鉄関連施設との関連が指摘されていた。しかし、本年度調査地内では製鉄関連遺構は確認されず、製鉄関連遺物も椀形鍛冶滓が2点出土したのみと少ない。この道路状遺構2条の具体的な性格・機能を言及できるような資料を得ることはできなかった。今後の本遺跡周辺での発掘調査が進展することによって本遺跡の評価が定まり、本遺跡周辺の各時代の景観が明確に復元されることを期待する。

2．玦状耳飾について

本年度調査地で出土した遺物として特筆すべきものに玦状耳飾の破片がある。ここで簡単に山陰地方での玦状耳飾の出土傾向をみることにする。前述の藤田氏の研究〔藤田1983〕[1]〔藤田1989〕[2]と最近の発掘調査成果[3]によると、山陰地方では、鳥取県米子市目久美遺跡・同県中山町築地峯遺跡・同県東伯町岩本遺跡・島根県海士町郡山遺跡・同岩泉遺跡・同県西郷町下西海岸・同県鹿島町佐太講武貝塚・同県美保関町サルガ鼻洞窟遺跡、京都府加佐郡大江町三河宮ノ下遺跡[4]、兵庫県養父郡関宮町杉ヶ沢・鉢伏高原遺跡[5]などで出土している。これら山陰地方での出土状況をみると、隠岐諸島とその対岸地域で玦状耳飾が出土する傾向がある。出土した各玦状耳飾をみると、三角形状の樋口分類でのE類と、石包丁形の樋口分類でのF類が多い。隠岐諸島とその海岸部で出土した諸例の石材である蛇紋岩や滑石の原産地および製作地は不明である。本遺跡例もこれら諸例の出土傾向に沿うものと認められる。本遺跡出土の玦状耳飾は破片であり、出土状況から第1次資料とはいえないが、前述したように、これまで名和町域では縄文時代前期から中期の集落遺跡は発見されていなかった。本遺跡で当該期の遺物が出土したことは隠岐諸島と本土間での広範な黒曜石の交易圏内である名和町域の当該地域も、当然縄文人の活動域であり、本遺跡周辺に集落が営まれていたことを証左する。

なお本遺跡に隣接し、本遺跡の調査終了後に発掘調査を行った名和飛田遺跡が、縄文時代前期以降の遺物包含地であることも加えて、本遺跡周辺に縄文時代前期から同時代中期の集落遺跡が存在することが推定できる重要な資料となった。

---

[1]藤田富士夫　1983　「縄文～古墳時代の玉製装身具」　『季刊　考古学』　第5号　雄山閣

[2]前掲〔藤田1989〕と同文献

[3]山陰考古学研究集会　2000　『第28回山陰考古学研究集会　山陰の縄文時代遺跡』

[4]天野末喜・神尾恵一　1971　「京都府由良川流域における縄文文化」『同志社考古』第8集　同志社大学考古学会お

よび、竹原一彦　1982『京都府遺跡調査概報　第2冊　三河宮ノ下遺跡発掘調査概要』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

[5]なお杉ヶ沢・鉢伏高原遺跡は、狭状耳飾を含む石製装身具の未成品や剥片が多数採集され、最古の製作遺跡のひとつである。渡辺昇・久保弘幸　1991『兵庫県文化財調査報告　第95冊　杉ヶ沢遺跡』　兵庫県教育委員会　および、高松龍暉・山口卓也　1990　『関宮町埋蔵文化財調査報告書5　ハチ高原縄文時代遺跡群』　関宮町教育委員会、大下明・山根実生子　1999　『関宮町埋蔵文化財調査報告書7　鉢伏高原遺跡』　関宮町教育委員会

表3　名和乙ヶ谷遺跡出土土器観察表

図	No	地区	出土層位	器種	法量(cm)			色調	調整		備考
					口径	底径	器高		内	外	
5	1	J9	道1の盛土5層	甕	−	−	−	青灰色		タタキ	須恵器
12	2	I11	包含層　褐色土	浅鉢	−	−	−	褐色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	縄文土器
	3	I11	包含層　褐色土	甕	(20.3)	−	−	橙色	−	回転ナデ	弥生土器
	4	J11	包含層　褐色土	杯	−	−	−	橙色	回転ナデ	回転ナデ	土師器、底部回転ヘラ切り
	5	I10	包含層　褐色土	甕	(32.1)	−	−	灰色	回転ナデ	回転ナデ、タタキ	須恵器
	6	J10	表土・I層上面	土鍋	(20.4)	−	−	暗赤褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ、回転ナデ	施釉陶器
	7	J9	I層上面	鉢	−	−	−	赤褐色	回転ナデ	回転ヘラケズリ	肥前系陶器

表4　名和乙ヶ谷遺跡出土石製品観察表

図	No	地区・層位	種別	法量（cm）				材質	備考
				最大長 最大高	最大幅	最大厚	重さ(g)		
12	S1	J11・撹乱	玦状耳飾	3.8	2.8	0.3	6.0	蛇紋岩	半分が欠損し、補修孔がある。色調は灰白色
	S2	排土	楔形石器	3.4	4.0	1.3	15.4	黒曜石	スクレイパーを転用する
	S3	J9・ I層下面	礫石	4.8	2.9	2.1	57.0	砂岩	
	S4	J11	礫	8.3	3.1	2.2	70.0	安山岩	

表5　名和乙ヶ谷遺跡出土鉄関連遺物観察表

図	No	遺物種類 （名称）	地区 層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	特徴
12	F1	椀形鍛冶滓	I層下面	3.6	6.7	2.6	67.0	−	なし	椀形鍛冶滓の半欠品である。一部に木炭痕がある。下面は不規則な凹凸が主体。
12	F2	椀形鍛冶滓	I層下面	5.0	4.4	3.3	71.0	−	なし	上面表面は平坦気味であるが、中央左寄りに木炭痕がある。破断面以外の表面は酸化土砂のため褐色を呈する。

第4章　名和小谷遺跡の調査

第1節　調査の概要

1．調査の経過と方法

名和小谷遺跡は大山から続く丘陵上にあり、名和町大字名和字小谷に所在する。平成14年度に名和町教育委員会による試掘調査が行われ、弥生時代の遺物が確認されたため、本調査を実施することとなった。

調査に先立ち、調査前の状況を記録するために地形測量と航空撮影を行った。その上で、5月7日に重機による表土剥ぎを開始し、人力による精査・検出・掘削を行い、6月30日に調査を完了した。調査面積は約4,962㎡である。調査中における排土は調査区内南西端に一旦仮置きし、山坪田農道を挟んだ南西部隣地に重機とキャリーを使い運んだ。

調査区は公共座標第Ⅴ系に従い、10m方眼を設定し、南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で表し、北東隅の交点をグリッド名とした。

調査区内は大きくA～D区にわけた。A区はすでに掘削されており、ほぼ岩盤まで掘り下げられていた為、遺構面は存在しなかった。C区は平坦な地形ではあるが、耕作による撹乱・削平が著しく、南端の一部に黒褐色土が存在したが、遺物を包含していなかったため、重機で除去した。C区では遺

A～D区配置図

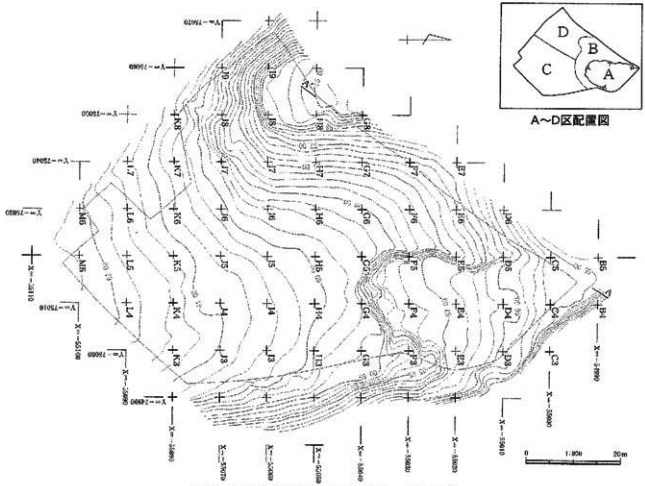

図13　調査前地形測量およびグリッド配置図

構の確認は出来なかった。D区は現代の溜池跡である。土坑を1基検出した。B区は緩やかな斜面である。遺物包含層が存在し、人力による掘り下げを行った。B区は緩やかな斜面になっており、一部流土が堆積し、その層からも弥生時代中期の遺物が多く出土した。

表6　新旧遺構対応表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
土坑1	SK1	土坑3	SK3	土坑5	SK7	土坑7	SK6
土坑2	SK2	土坑4	SK4	土坑6	SK5		

2．基本層序

近現代の堆積である表土・耕作土を除きⅠ～Ⅵ層を確認した。調査地は丘陵上に位置し、現代の土取り跡（A区）と緩やかな傾斜地（B区）、平坦部（C区）、現代の溜池（D区）からなる。C区は近・現代の梨畑によってほとんどが撹乱・削平されており、Ⅱ層以下しか確認できなかった。Ⅰ層はB区にのみ確認できた。なお、Ⅱ層以下は地山の堆積層で、名和乙ヶ谷遺跡や、茶畑遺跡群の堆積とほぼ共通する。(図14)

Ⅰ層：暗褐色土　第1遺構面

B区に10～16cmで堆積する。弥生時代中期の包含層と考えられる。

Ⅱ層：にぶい黄褐色土　第1遺構面

B・C区の一部に残る。いわゆるソフトローム層である。

Ⅲ層：黄褐色砂質土　第2遺構面

姶良丹沢火山灰層、いわゆるＡＴ層である。B・C区のほぼ全体に10～25cmの厚さで堆積する。

Ⅳ層：にぶい黄褐色土（やや粘質）　第2遺構面

B・C区のほぼ全体に10～25cmで堆積する。

Ⅴ層：褐色土（やや粘質）

B・C区の一部で14～16cmの堆積を確認した。

Ⅵ層：明褐色土（やや粘質）

B・C区の一部で確認したが、厚さは不明である。

なおB区の一部分に1～3層を確認した。弥生時代中期の遺物を多量に包含することから、Ⅰ層と時期幅をもたないと考えられる。D区では4層と近世の溜池の堆積と思われる5－1～5－4層（無遺物層）を確認した。6層は地山層であるが、Ⅵ層の何層下かは不明である。各層の土色は以下の通りである。

1層：黒色土（しまりややなし）

2層：褐色土（しまりややなし）

3層：黒褐色土（しまりややなし）

4層：にぶい黄褐色土（しまりややなし）

5－1層：黒褐色土

5－2層：褐色土

5－3層：黒褐色土（しまりあり、径0.5～5cmの礫多く含む）

5－4層：（しまりあり、径0.2～0.5cmの礫多く含む）

6層：明黄褐色土（径0.2～0.5cmの礫多く含む）

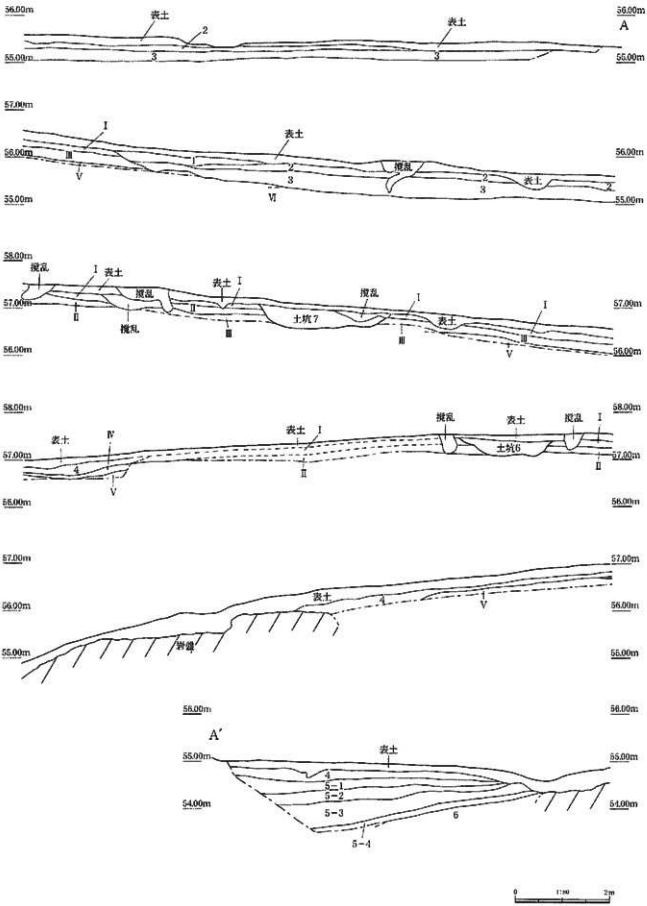

図14　調査地西壁断面図

第2節　第2遺構面の調査

1．調査の概要

第2遺構面で調査した遺構は、B区、D区から検出した土坑5基である。その内3基は、底面に小ピットをもつ、いわゆる落し穴状土坑である。検出した土坑に伴う遺物は出土していない。

B区の第2遺構面を被覆する暗褐色土（Ⅰ層）からは、縄文時代中期・後期、弥生時代中期後葉の遺物が出土している。包含する遺物より、弥生時代中期後葉以降の堆積と考える。Ⅰ層除去後、Ⅱ層またはⅢ層上面（第2遺構面）で遺構を検出した。

調査区の西側に近接する名和衣装谷遺跡からも縄文時代中期の遺物が出土しており、周辺に当該期の集落の存在が推察される。

2．遺構の調査

土坑1（図16、図版7）

B区で検出。平面形はほぼ円形を呈する。長軸約120cm、短軸約110cm。検出面からの深さは約120cmである。底面のほぼ中央に径約20cm、深さ約46cmのピットをもつ。Ⅲ層からの掘り込みを確認している。形態から、いわゆる落し穴状土坑であろう。遺物は出土していない。

土坑2（図16、図版7）

B区で検出。平面形はほぼ楕円形を呈する。長軸約156cm、短軸約130cm。検出面からの深さ約118cmである。二段に掘り込まれている。底面のほぼ中央に径約18cm、深さ約33cmのピットをもつ。Ⅲ層

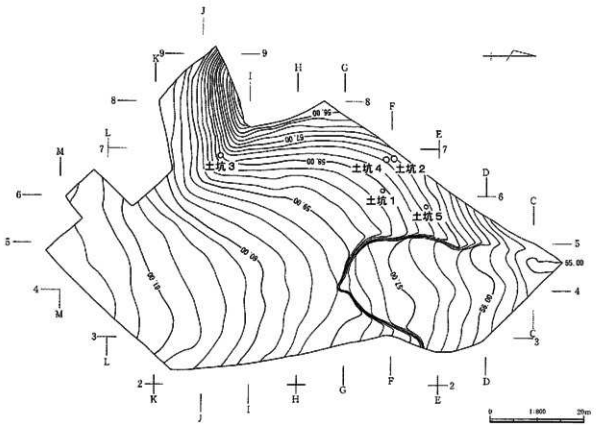

図15　第2遺構面平面図

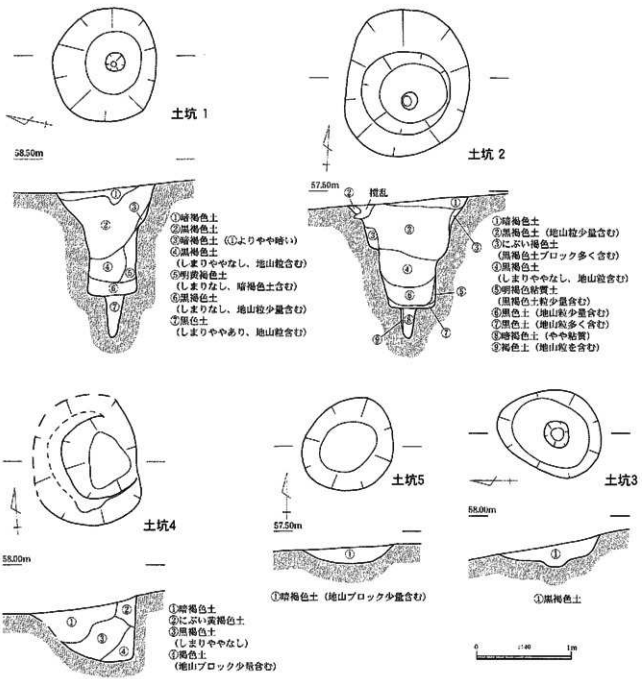

図16　土坑1～５遺構図

からの掘り込みを確認している。いわゆる落し穴状土坑であろう。遺物は出土していない。

土坑３（図16）

D区で検出。平面形は楕円形を呈する。長軸約110cm、短軸約104cm。検出面からの深さ約８cmである。底面のほぼ中央に径約28cm、深さ約９cmの浅いピットをもつ。近代の溜池造成時に上部は削平されている。形態から、いわゆる落し穴状土坑であろう。遺物は出土していない。

土坑４（図16）

土坑２の南側で検出。平面形はほぼ円形を呈すると思われる。長軸約140cm、短軸約120cmと予測する。検出面からの深さは約55cmである。二段に掘り込まれている。遺物は出土していない。

土坑５（図16）

B区で検出。平面形はほぼ円形を呈する。直径約100cm。検出面からの深さは約24cmである。遺物は出土していない。

第3節　第1遺構面の調査

1．調査の概要

第1遺構面で調査した遺構は、土坑6、7である。いずれも、B区北西側の調査地境に位置し、約6.3mと近接している。埋土には焼土粒を含む。形態、埋土ともに類似する。遺物は出土していない。

重機により表土除去後、暗褐色土（I層）の上面に遺構面の存在を想定し調査を行った。精査の結果、I層上面（第1遺構面）での検出が困難であったため、I層除去後に土坑6、7を検出した。土層断面の観察から、どちらもI層上面から掘削されていることがわかっている。

2．遺構の調査

土坑6（図18、図版7）

遺構の北西側は調査地外である。長軸200cm以上、短軸68cm以上。検出面からの深さは約32cmである。平面形は楕円形を呈すると思われる。埋土上層に焼土粒を多量に含んでいる。遺物は出土していない。遺構はI層上面から掘削されている。

土坑7（図19、図版7）

遺構の北西側は調査地外である。長軸273cm以上、短軸186cm以上。深さ約52cm。平面形は楕円形を呈すると思われる。埋土に焼土粒を含む。遺物は出土していない。遺構はI層上面から掘削されている。

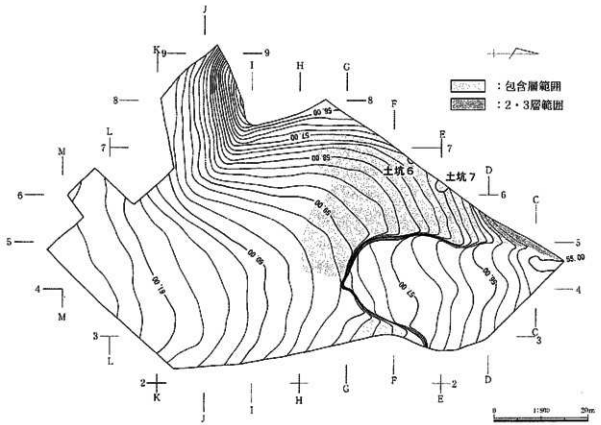

図17　第1遺構面平面図

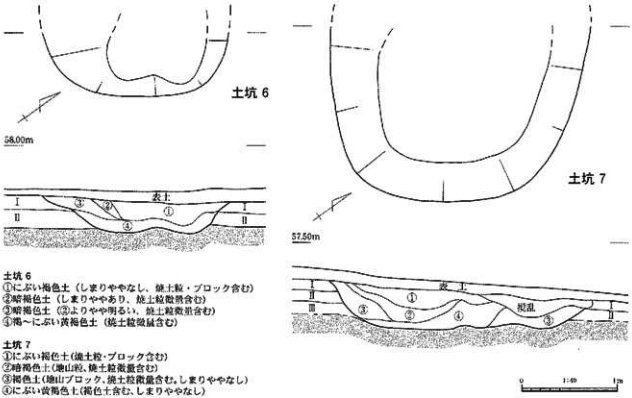

図18　土坑６・７遺構図

第４節　遺物包含層の調査（図14・17）

１．概要

Ｂ区に暗褐色土包含層（Ⅰ層）を検出した。本来的には調査区を広く被覆していたとことが想定されるが、Ａ・Ｃ・Ｄ区は掘削もしくは撹乱をうけており、地形の低い北西側のＢ区のみに堆積の一部が残存したものと考えられる。

また、同じくＢ区に褐色土包含層（３層）、黒褐色土包含層（２層）を検出した。Ｂ区の中でも最も地形の低い部分に、暗褐色土包含層に続き、黒褐色土包含層、褐色土包含層の順に堆積している。いずれも、比較的短い時間幅で谷部に流れ込むように堆積したものと考える。

２．堆積状況

暗褐色土包含層（Ⅰ層）は、北西側の最も堆積が厚い部分で約16cmを測る。南東側は薄くなる。縄文時代中期・後期、弥生時代中期後葉の遺物を包含している。よって、弥生時代中期後葉以降の堆積と考える。包含する遺物の時間幅が大きいことから、二次的に堆積したものと推察する。

黒褐色土包含層（３層）は、北西側の最も堆積が厚い部分で約18cmを測る。南東側は薄くなる。暗褐色土包含層堆積後に、谷部に流れ込むように堆積している。主に弥生時代中期中葉・後葉の遺物を包含している。よって、弥生時代中期後葉以降の堆積と考えている。

褐色土包含層（２層）は、北西側の最も堆積が厚い部分で約16cmを測る。南東側は薄くなる。黒褐色土包含層が堆積した後、比較的短い時間幅で堆積したと考える。主に弥生時代中期後葉の遺物を包含している。よって、弥生時代中期後葉以降の堆積と考えている。

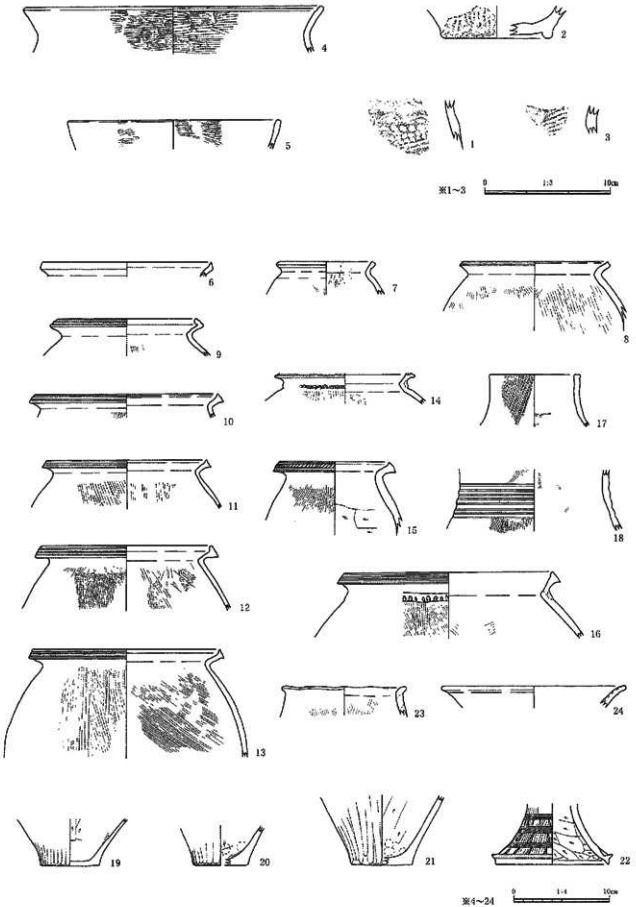

図19　調査地内出土遺物実測図（1）

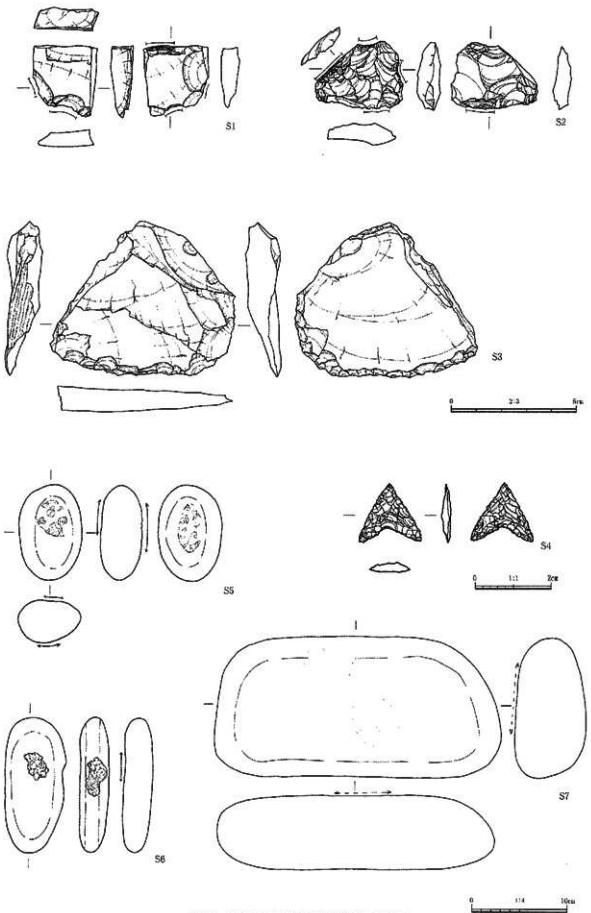

図20　調査地内出土遺物実測図（2）

第5節　調査地内出土遺物（図19～22、図版8・9）

1．暗褐色土包含層出土遺物（Ⅰ層）

1、2、5は縄文土器である。1は縄文土器の深鉢である。外面に刺突文と沈線文を施している。縄文時代中期の船元式に相当すると思われる。2は縄文土器の底部片である。外面に撚糸文が施される。縄文時代中期後葉の里木Ⅱ式に相当すると思われる。5は縄文土器の口縁部である。内外面ともにミガキ調整される。縄文時代後期以降の粗製土器と思われる。

12、15は甕の口縁部である。12は口縁端面に3条の凹線が施される。15は口縁端面に刻みを施した後、2条の凹線を施している。

12、15ともに、弥生時代中期後葉のものである。21は弥生時代中期のものと思われる底部片である。

2．黒褐色土包含層出土遺物（3層）

7、8は甕の口縁部である。7は口縁端部が僅かに肥厚し、小さな端面を持つ。8は口縁端面に1条の凹線が施される。7、8ともに、弥生時代中期中葉のものである。9、14は甕の口縁部である。9は口縁端部を上下に肥厚させ、端面に2条の凹線が施される。14は頸部に指頭圧痕貼付突帯が施される。ともに、弥生時代中期後葉のものである。19、20は弥生時代中期のものと思われる底部片である。22は弥生時代中期のものと思われる脚部である。スカシが施されるが、貫通していない。23は甕の口縁部と思われる。弥生時代前期のものであろうか。

S4は黒曜石製の石鏃である。長さ1.58cm、幅1.6cm、厚さ0.28cm、重さ0.4gを測る。蛍光X線分析の結果、石材の黒曜石は隠岐島久見産であることがほぼ同定された（第4章第6節参照）。S6は敲石である。安山岩製のものである。

3．褐色土包含層出土遺物（2層）

10、11は甕の口縁部である。ともに口縁端部を上下に肥厚させ、口縁端面に2条の凹線を施している。弥生時代中期後葉のものである。17は直口壺の口縁部と思われる。口縁端面は、凹線状にやや窪む。

S3は安山岩製のスクレイパーである。左側面に原礫面を残す板状の剥片を素材とし、下縁を中心に表裏それぞれから刃部調整を行う。S7は一部に擦面が認められ、台石ないしは石皿の可能性がある。石材は安山岩である。

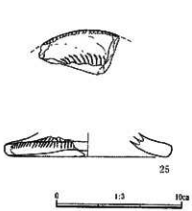

図21　調査地内出土遺物実測図（3）

4．調査地内出土遺物

表土、または撹乱土中から出土した遺物である。3、4は表土中の出土である。3は縄文土器である。小型の鉢と思われる胴部片である。縄文時代後期中葉の四元式に相当すると思われる。4は縄文土器の口縁部片である。内外面ともにミガキ調整され、内面に1条の沈線が施される。縄文時代後期中葉のものと思われる。

6は甕の口縁部である。弥生時代中期中葉のものである。13、16は甕の口縁部である。撹乱土中の出土である。13は口縁端部を上下に肥厚させ、口縁端面に3条の凹線を施している。16は口縁

端部を上下に肥厚させ、口縁端面に2条の凹線を施している。頸部に指頭圧痕貼付突帯をもち、指頭圧痕貼付突帯に刺突文を施した後ナデている。13、16ともに、弥生時代中期後葉のものである。24は表土中の出土である。甕形器台の口縁部である。古墳時代前期のものであろう。25は脚部と思われる。外面に爪形状のキザミが施される。

S1、S2は表土中出土の楔形石器である。S1は安山岩製である。裏面がポジ面で、板状の剥片を素材にしている。右側面に剪断面が形成されている。上面の剥離面も剪断面の可能性がある。左側縁、下縁、上面の縁辺に細かな階段状剥離や潰れが見られる。S2は黒曜石製である。素材剥片の構成面が多く観察でき、正面に素材剥片の背面と原礫面、裏面に主剥離面、右側面に打面がそれぞれ残る。左肩側面に形成された剥離面は剪断面の可能性がある。器体の大部分に二次的な剥離痕が見られる。剥離は上下方向が主体であるが、左右方向も見られる。上下縁、左右側縁には細かい剥離とツブレが観察できる。切り合い、ツブレの状態から、まず図の縦軸方向で使用し（剪断面を形成）、次に横軸方向で使用した後、最終的に図の状態で使用されたものと考えられる。

F1は表土中の出土である。幅が比較的狭くやや小型の直刀片、または鎌の可能性がある。芯部のメタル部が錆化して、表面の水酸化鉄層が薄皮状に残っている。錆ぶくれで幅が広がってしまっているが、背側の厚みが残っている可能性が高い。

なお、B区撹乱土中より出土している「国府型ナイフ形石器（S8）」と、A区表土中より出土している「分銅形土製品（26）」については、第4章第7節にて報告する。

図22　調査地内出土鉄製品実測図

参考文献

＜縄文時代＞

岩鼻俊行・大野哲二ほか編　2003　『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』　鳥取県教育文化財団発掘調査報告書80　鳥取県教育文化財団

岩鼻俊行　2003　「妻木法大神遺跡出土の縄文前・後期土器について」『妻木法大神遺跡』　鳥取県教育文化財団発掘調査報告書81　鳥取県教育文化財団

平井　勝　1993　「縄文後期・四元式の提唱　－彦崎K2式に先行する土器群について－」『古代吉備』第15集　古代吉備研究会

＜弥生時代＞

辻　信広　1999　『茶畑山道遺跡』　名和町弥藏文化財発掘調査報告書第24集　名和町教育委員会

正岡睦夫・松本岩雄編　1992　『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社